

## 書評

## 電子計算機入力のための文字・図形の自動認識

—電気学会 文字・図形自動認識専門委員会編—

戸川隼人\*

## 1. 勉強会の報告書である

坂井利之、元岡達、飯島泰三といった情報科学の大先生たちが、「近ごろ文字読取機や手書き符号読取機がかなり実用化されているようだ。現状を調べてみようか」という気を起こして勉強会を作り、専門家を招いて話を聞いたり、実際に使っているところを見学したり、資料を集めたりした。その調査報告が、この本である。

だから、この本は聞き手の立場で編集されている。教えてやろう、宣伝してやろう、という一方的なところがなく、事実を総合的な見地から整理してまとめてあり、聞き手が知りたいと思うことは根掘り葉掘り聞き出してよく書いてある。

## 2. 圧縮された記述、つめたい文章

勉強会とはいっても、理論や実験ではその方面の最先端をご存知の大先生である。頭の回転も人一倍速い。だから、この本の説明文は、ある程度の教養がないと理解しにくいであろう。

その代わり、実に詳しく書いてある。あいまいなゴマカシがなく、原理だけでなく設計データに近いことまで、要点をおさえて記述されている。

要するに入門書でなく専門書である。もう少し正確に言えば、コンピュータとパターン認識について一とおりのことは知っている人が、新しく OCR や OMR, MICR などを勉強するための入門書ないしはハンドブックである。

## 3. 「OCR, OMR ハンドブック」である

文字、図形の自動認識という書名は適当でない。この書名だと、いかにもパターン認識の教科書のようにあるが、内容はむしろ、OCR, MICR, OMR の実際の製品の説明と応用例が中心である。

すなわち、文字や符号の読取機を開発する技術者のための資料、というのがネライである。

このため、字体や用紙の規格、不鮮明さのデータ、実務における使用状況、現場における問題点（特にリジェクト率）、各種の読取方式の比較検討、商品としての今後の見通し、などが詳細に書かれている。紙送り機構のように、認識に直接関係ないことまで書いてある点からみても「設計ハンドブック」である。

## 4. ユーザが読んでもおもしろい

主旨は設計資料であるが、そこに収録されている豊富な資料は、ユーザが読んでも興味あることが多い。

たとえばアプリケーション実例として、国鉄、電電公社、郵政省、統計局、住宅公団、関西電力、日銀などの、OCR, OMR 導入経過、利用状況、問題点などを詳しく説明してあり、百貨店、私鉄、保険などの業界における利用状況の総合報告もある。

いずれも一般企業のコンピュータ担当者が読んでも非常に参考になる内容で、ビジネス雑誌顔負けの読物である。OCR, OMR 関係で、これだけ充実した資料は過去にない。これらの機器の導入を検討中の企業の担当者にとっては必読の書である。

## 5. 眺めるだけでも楽しい豊富な資料

現場のナマの資料をたくさん集めてあるので、本文を読まないでも資料だけで結構楽しめる。

たとえば、伝票のサンプルが23例のっている。日刊スポーツの社員勤務カード (OMR)、ダイハツ自動車の部品出荷カード (OMR)、京阪電鉄の旅客調査カード (MICR)、関西電力の検針票 (OCR) など。

また OCR, OMR 機器の性能比較表がのっていて、それには価格が書いてある。それを見ると一番安いマークリーダは75万円で買えることがわかる。

西武百貨店では1日に25万枚の OCR 伝票を処理していて、そのうち6万枚は外注している、といった

\* 航空宇宙技術研究所

ようなこともわかる。

## 6. 学問的内容は物足りない

この本の企画としては図形認識の展望、解説ということも意図したようであるが、紙数の関係であまりにも圧縮され単純化されてしまって内容に乏しい。

たとえば、図形の構造記述が1ページ、三次元物体の認識が3ページ（図も含めて）である。これでは、

二、三のトピックスの紹介だけに終わってしまうのも無理はない。せめて文献リストだけでも充実したものを収録すべきであった（本書には一つもあげてない）。

したがって図形認識の学問的な近況を本書に期待することはできない。その点では本誌（「情報処理」）の論文や解説のほうが、はるかに親切かつ新鮮である。

（オーム社）

（昭和45年2月7日受付）